

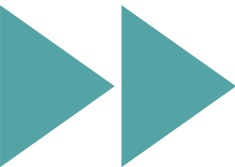
国境の狭間に置かれた人々に 目を向けてみませんか？

～ 難民の思いに寄り添うために～

模擬入管2021年度活動報告書



国際の狭間に置かれた
人々に寄り添う
心と知
KARDIANOIA



目次

1 事前学習

- ・ 難民の状況
- ・ 難民認定手続
- ・ 入管問題を多角的に考える

2 入管訪問

- ・ 入管を訪問した学生の感想
- ・ 竹内正宣先生のコメント

3 社会的な発信

- ・ 難民申請シュミレーション
小宮理奈さんのコメント
- ・ 入管面談シュミレーション
- ・ 講演会

4 感想

- ・ 参加メンバーの感想
- ・ 助言者のコメント

模擬入管の活動趣旨

国境の狭間に置かれた人々に
目を向けて見ませんか？

●前期（5～7月）

国際の狭間に置かれた人々の痛みについて、まずは入国管理・難民問題の学習を通じて、国際の狭間に置かれた人々の痛みを①「感じる」・②「知る」ことで、自分たちの考えを確立させます。

●中期（8～11月）

大村入管センターの訪問を通じて、国際の狭間に置かれた人々の痛みを③「寄り添う」実体験を得ます。

●後期（11～12月）

以上の成果を自らの学びにとどめず、社会に向けて④「伝える」ことで、成果を社会に還元していきます。その達成指標として、後期終了時期に高校生・大学生・社会人に向けて、体験シミュレーションや講演会を実施します。

●以上の段階を経ることは社会の人々が入国管理・難民問題に触れる機会を創り出すことにつながります。日本には「帰国できない」にも関わらず「帰国を強いられる」事情をもつ被収容者がいるが、その実情や入国管理センターでの処遇が知られていません。入管・難民問題を「まだ知らない人」、「関心が薄い人」に向けて発信することで、自分事として考えるきっかけ作りをすることを最終目的に定めます。



1, 事前学習

- 難民の状況
- 難民認定手続
- 入管問題と多角的に考える

事前学習

前期（5～7月）には、入管・難民問題に取り組むうえで必須となる基本的な知識を学びました。グループごとにテーマを設定し、文献調査を行い、口頭で報告を行うことで理解を深めました。

.....

難民の状況

まず、難民の母国での状況、そして難民が日本に入国する理由を調べました。現在約8240万人もの難民が存在しており、政治体制、歴史、民族や宗教の対立、南北問題、貧困という状況下にあること、そして日本に入国する難民は、逃げる先が限られているなかで、偶然日本行きのビザが下りたなどの理由から来日することが分かりました。また「第三国定住」という日本政府が主導する難民受け入れがあるということを知りました。

.....

難民認定手続

次に、難民認定手続と日本に滞在している難民について調べました。難民として認定されるには、迫害を受けていた客観的証拠である陳述書が必要です。しかし、客観的証拠を挙げる事の難しさや金銭的問題、言語能力の問題などにより陳述書を完成させる事が出来ない外国人が多くいます。また、日本で働く多くの外国人が労働環境の悪さから失踪し、在留資格を失い不法滞在者や偽装難民となることが問題となっていると学びました。

.....

入管問題を多角的に考える

最後に、日本の入管における現状を様々な視点から捉え、そこから見えてくる課題や改善策について考えました。具体的には、「海外からみた日本の入管」「国内の入管に対する意識」「日本と海外の入管における制度や環境の違い」の3点を調べました。日本の現状について学んだうえで、その制度が国際機関からどのように評価されているのかを知り、海外の収容施設における待遇との差を比較したりすることで、多方面から学び日本の入管の在り方を新たな視点から考えるきっかけになりました。

.....



2, 入管訪問

- 入管を訪問した学生の感想
- 竹内正宣先生のコメント

入管を訪問した学生の感想

事前学習を机上の空論にしないために、そして後期（9～12月）に実施する社会的な発信に現実性を持たせるために、長崎県大村市の大村入国管理センターを訪問し、被收容者の方との面会を行いました。その指導にあたっては、実際に面会ボランティアをされている竹内正宣先生と川田邦弘さんにご協力いただきました。

.....

竹内先生や收容されているの方の話を聞いて、アクリル板一枚でこんなに世界が違うのかと感じました。同じ日本で生活しているにも関わらず、私たちが暮らす社会とは明らかに違う、收容者だけの閉ざされた社会の存在を実感しました。その状況で暮らす中での不安や不満等について聞いてほしいという思いがとても伝わってきた30分間でした。收容者の方々が初対面の学生に自分の話を沢山してくださった事に感謝し、今後も社会の闇に背を向けずに関心を持ち続けたいと思います。

法学部国際関係法学科1年 今林夏樹

.....

机上で入管について学習することと実際に足を運んで被收容者の方々と面談することにギャップを感じました。面談時は、感じたことのない空気感や緊張感が張り詰めており、自分自身会話できるような状態ではありませんでした。面談後は色々な葛藤に苦しみ悩みましたが、この活動で一人でも多くの人にこの問題を認知して貰えたなら、今回の面談は意味あるものになったと思います。また、これ以外に我々学生が彼らのためにできることは何か他学生と考えていきたいです。

法学部国際関係法学科2年 上野大我

.....

竹内先生が仰っていた「傾聴が大切」ということの意味を理解できた面会でした。30分間の面会時間のほとんどを被收容者の方が話されていて、竹内先生の話を遮って話されていた場面もあり、この狭い世界の中で自分の身に起きていることを伝えたい、聞いて欲しいという思いを強く感じました。この貴重な経験を無駄にしないよう、今後も社会の影で助けを求めている人がいることを忘れず関心を持ち、間接的にでも自分にできることを考えていきたいと思います。

法学部国際関係学科4年 房村佑希与

入管を訪問した学生の感想（続き）

『自分に何ができるのか』その疑問ばかりが残る経験でした。KARDIANOIA模擬入管の活動に参加し続け2年、入管問題については詳しくなったつもりでした。しかし、詳しくなったのは『知』だけで、寄り添うための『心』が足りていなかった事に今回の訪問で気づかされました。

被收容者の方には『頑張って下さい』という言葉すらかけることができません。日本語の勉強、公的機関へのアプローチ等既に彼らは自身の幸せのために十分頑張っているからです。それでも報われない状況にあります。『私はどうしたらいいんですか』という被收容者の方の言葉を私は2年間の活動で想像できていませんでした。やっと入管問題に対する『心』と『知』が揃った今、『私にできる事』を改めて考え直し来年の活動に活かしたいと思います。

文学部外国語学科フランス語専攻3年 矢嶋優奈

今回、2.30分程度の面会時間にも関わらず、その人の人生の重さを感じ、とても深く濃い時間でした。特に、面会の最後に言われた「前にも後ろにも進めない」「無人島においてくれたらいい」という言葉が自分の中で深く心に刺さりました。この言葉は一番私達に伝えたいことだったように感じ、八方塞がりの状態に苦しむ方に対して、何もできない自分が悔しく、自身の無力さを改めて感じました。

また、昨年入管シミュレーションを実施した際には、本当に起こっている問題だと参加者に感じてもらうことを目的とし、実際に多少なりとも感じて頂くことができたのだと思っていました。しかし、現状はその何倍も重く、相当な覚悟が必要であり、問題に対して自分が現実の問題だと認識できていなかったことを感じました。

今回、面会ボランティアに参加して得た感想は、言葉にしてしまうと軽くなってしまいうまく表現することができませんが、時間が立つほど心に重く残るような体験でした。

法学部国際関係法学科2年 久光耀子

対面した方は、想像していたよりも「普通」の印象でした。しかし彼の話をきくと、切実な思いややりきれなさが伝わってきました。面談の中で、ネットでの誹謗中傷で自殺して亡くなった木村花さんと、入管職員からひどい扱いを受けながら亡くなったウィシュマさんに対する政府の対応を比較し、あなたと私で何が違うのかと問われました。入管訪問で感じたことには、教科書のどこにも載っていないし、実際に行かなければ考えもしなかったことが沢山含まれていました。私がそこから何を考えたか書くととても収まりきれませんが、これからも心に残り続けるはずです。

人間科学部心理学科4年 喜安花央里

竹内正宣先生のコメント

- ・2010年4月55才で行政書士開業。高齢者・障害者の成年後見、外国籍者の権利擁護が主な業務。
- ・開業当初より行政書士の傍らで「移住労働者と共に生きるネットワーク・九州」の事務局で活動。



(主な活動)

- ・2010年9月から大村入国管理センター収容の外国籍者の面会（月1回）
- ・2013年頃からカトリック大名町教会での外国人生活なんでも相談（毎月）
- ・2017年4月からカトリック浄水通教会でのベトナム人対象の生活相談（偶数月）
- ・相談会以外でも、技能実習生、日本語学校留学生等の救済活動
- ・業務としても外国人からの在留資格（通称ビザ）等の相談を受ける。



「入管訪問をした学生」

行政書士 竹内正宣

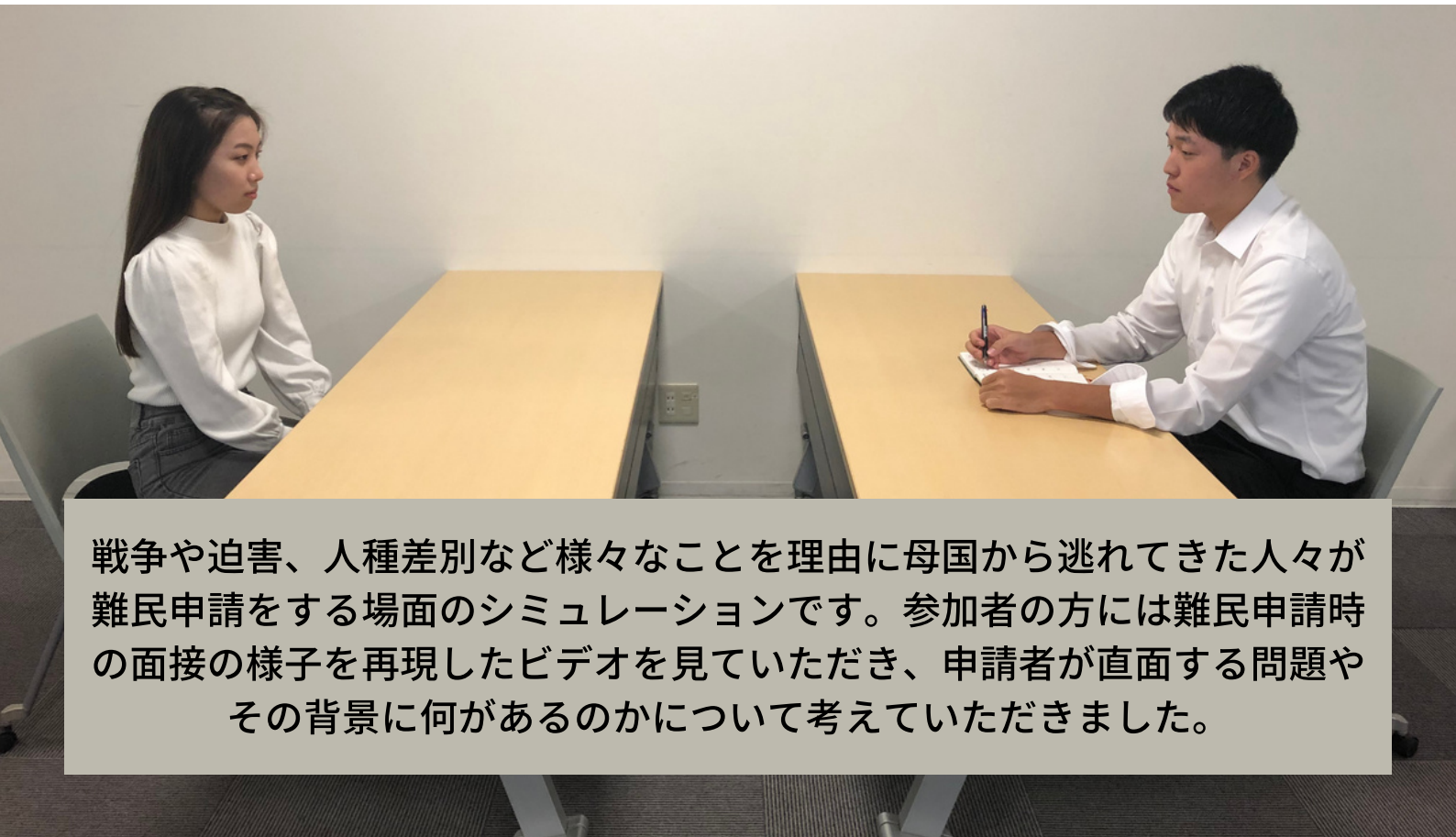
本年の訪問は、参加者が立ち位置を自問する機会になったようです。一昨年の訪問は、2回目に被収容者に質問する前提で1回目の面会に臨みました。曲がりなりにも被収容者に正面から対面する前提でした。今回は1回のみで、模擬入管前に何とか経験を、ということでした。正対することはなく記録者でも参観者でもよく、立ち位置を明確にしておく必要がなかったのでアクリル板の向こうの普通の人に驚き、こちらの自分は一体何なんだ、と動揺したことでしょう。この体験が今後必ずや役立つことでしょう。



3 , 活 動 報 告

- 難 民 申 請 シ ミ ュ レ ー シ ョ ン
 - ・ 小 宮 理 奈 さ ん の コ メ ン ト
- 入 管 面 談 シ ミ ュ レ ー シ ョ ン
- 講 演 会
 - ・ 吉 山 昌 さ ん の 紹 介

難民申請シミュレーション



戦争や迫害、人種差別など様々なことを理由に母国から逃れてきた人々が難民申請をする場面のシミュレーションです。参加者の方には難民申請時の面接の様子を再現したビデオを見ていただき、申請者が直面する問題やその背景に何があるのかについて考えていただきました。

小宮理奈さんのコメント



小宮理奈さん

UNICEFウガンダ事務所や国内外のNGOを経て、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）カスル事務所（タンザニア）、アンマン事務所（ヨルダン）、ダッカ事務所（バングラデシュ）にて准保護官として難民保護に従事。笹川平和財団に研究員として在籍。今回の難民申請シミュレーションの監修をしていただきました。

今回、難民申請シミュレーションにアドバイザーとして参加しました。私は、過去7年ほど、国連難民高等弁務官（UNHCR）やNGOにて難民と関わってきました。現在は、研究者としてアカデミックな視点から難民問題に取り組んでいます。現場で働いていたころから、日本は難民の受け入れが少ないため、日本の学生にとって難民問題はあまり現実味のない 이슈なのだと感じていました。模擬入管は、そんな現状を変え、難民問題をより身近に感じてもらうために試行錯誤しています。シミュレーションであるため、現実とは乖離している箇所も多々ありますが、これを機に、多くの方々に難民問題に関心を持っていただければと思います。

参加者の方々の感想

元々、難民申請や入国管理センターの問題に興味があって、このプログラムに参加しました。口では「難民申請をしないなんて、申請者が可哀想」と言えますが、小宮様から実務の話を聞くと、そう簡単に難民申請をできない理由もあるのだと思いました。それでも、本当に命の危機を迫っている人を見捨てるようなことはしてはならないと思います。なので、少しでも難民申請が通るような制度になるように、自分が貢献できればいいなと思いました。（大学3年生）

難民をどのように受け入れているか想像がつかなかったが実際に勉強してみて何も知らないままではいけないと感じた。（大学2年生）

実際に質問をする際に、相手の気持ちを上手く引き出すのが難しく、本当の入国審査官は、相手に寄り添うだけでなくその人の本心を聞くためにも、また、本当に困っている人を助ける制度にするためにも責任感を持ち、質問をしなければならないと聞いた時が印象に残っています。（高校2年生）

参加前は、日本は難民申請をほとんど行わない国という印象を持っていました。そのため、難民申請者に対して、優しくない国と思っていました。しかし、小宮様のお話を聞いた時に、「私情に流されて、国の安全を維持できなくなることはいけないこと」という風に思いました。ただ、可哀想という気持ちだけでは務まらない仕事だと実感しました。（大学3年生）

入管面談シミュレーション



オーバーステイ等の理由により滞在資格を失ってしまった非正規滞在者の中で、日本の入管収容施設に収容されている方々と面談する場面のシミュレーションです。

今回は実際に長崎県大村市の入国管理センターで被収容者との面会を行った学生が被収容者役を演じ、参加者の方には実際に被収容者役の学生に質問をして頂く形でシミュレーションを行いました。



参加者の方々の感想

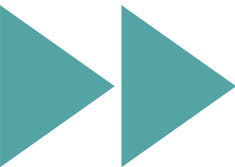
日常生活にも当てはまることですが、意見を引き出すことの難しさをより実感しました。また、被収容者の様子を面会を通して体験することができていい経験になりました。(大学4年生)

被収容者役の方に質問をする際、返答が想像していたものと違って戸惑ってしまいました。現実なんだと思いました。(高校2年生)

質問するだけではなく相手が話していることから気持ちや情報を汲み取ることの難しさを感じたけど、面会を通していろんなことを知るきっかけになってよかった。(高校2年生)

被収容者役の方と実際に対面して面会をしてみると、どこまで質問いいのかとかどんな風に質問すればいいのかがすごく難しく感じました。(大学2年生)

自分から進んで調べるようになり、ただ寄り添って可哀想などと思うのではなく、自分にはどうすることができないことであっても、自分の身近なことに置き換えてその上で解決策を見つけることも大事なのだと思いました。(高校2年生)



講演会

難民問題は他人ごと？

～ 国境の狭間に置かれた人々に目を向けてみませんか～

12月18日（土）に独立行政法人国立青少年教育振興機構国立夜須高原青少年自然の家との共同開催でオンライン講演会を開催しました。講師には、吉山昌様をお迎えし、難民の問題についてわかりやすくご講演いただきました。参加者の皆さんとの感想共有や質疑応答を行い、短い時間でしたが難民問題について考える貴重な時間となりました。



講演タイトル：日本の難民問題～もし私たちが難民だったら～

講師：吉山 昌さん

認定NPO法人難民支援協会 事務局長 兼 広報マネージャー。学生時代の頃から難民支援協会の設立に関わり、一般企業での勤務を経て2011年より難民支援協会に入職。2012年より公益社団法人難民企業サポートファンドを設立し、代表事務を勤める。



参加者の方々の感想



難民問題について詳しく知ることができて良かったです。
(大学1年生)

難民支援の現状をご報告いただき、参考になりました。
(50代男性)

難民問題について状況を知ることができ、意見を交換することができた。自分がこの問題とどのように向き合えば良いのかヒントをもらいました。
(大学3年生)



4 , 感 想

- 参加メンバーの感想
- 助言者より

参加メンバーの感想

入管というものに引きつけられ今回の活動に参加しました。参加者としてこれまで触れたことがなかった「難民」「入国管理」を学習しつつ、前半ではリーダーを務めていました。新たな内容はもちろん、チームの管理など多くことを学びました。特に「過去における成功体験は現在に役立つとは限られない」ことを知ったのは今回の大きな収穫です。

文学部外国語学科フランス語専攻4年 楊懿之

ニュースで入管のことを知り、模擬入管の活動に参加しました。知識がない状態からのスタートで戸惑うこともありましたが、学年関係なくみんなで何かを学び考えるということはすごく新鮮でいい経験になりました。この活動を通して入管問題について知り、当事者に寄り添うことの大切さを学びました。私たちにできることはとても少ないですが、他人事と捉えるのではなく身近な問題であることや考えるのをやめないことはできると思います。また、入管問題だけでなく他にも私が知らないような問題が多くあると思います。そのような問題に目を向け、視野を広くして生活していこうと思います。

商学部経営学科3年 福田武之

私はこの活動に参加し、知ること、想像することの意義を強く感じました。活動していく中で、入管問題や難民の方々が抱える思いは決して私たちにとって遠い存在のものでないことを感じ、より多くの方にこの問題を身近なものだと知ってほしいという思いが次第に強くなりました。問題意識をもった仲間とともに学び、向き合い、私たちに何ができるのかと考え、試行錯誤した時間は私自身にとっても貴重な経験だったと思います。長い時間をかけて作成し実施したシミュレーションや講演会では、参加者の方々と考える貴重な時間となりました。私たちにできることはわずかですが、これからも知ること、想像することから目を背けないでいようと思います。

法学部国際関係法学科2年 武本倅奈

参加メンバーの感想（続き）

KARDIANOIAの活動を通して相手に寄り添うことの必要性について学ぶことができました。今までは、「難民」について勉強しているから他の人よりも知った気でおり日本で問題になっているトピックについて触れられたとことで学びは終わってしまっていました。しかし、今回の活動でシュミレーションや講演会を聞き“人に寄り添う、そして私たちに何ができるかを考える”。今までしてきたことの一步先に踏み進めることでこの問題が他人事ではなく身近な問題であることがわかりました。自分から学びの環境に身を置かないと気づけなかったと思うので大学生のうちに学ぶことができて良かったです。また、今回の活動で終わりではなく学び、考えたことを皆さんに発信し心に寄り添う、そして私たちに何ができるのか考えていただければ良いなと思います。

法学部国際関係法学科1年 井出菜々子

最初は入管の知識も何にもない状態からのスタートでしたが、この活動を通して当事者の立場になって考え、学び、向き合う事で色々な事が見えてきました。入管や難民問題は遠い国の話のように思っていたましたが、私達の身近で起きている問題であり、他人事ではないと強く感じました。またシュミレーションや講演会を通して、相手の立場になって考える事がどれほど大切か実感することができました。ただの調べ学習でない、今までとは違った視点からの学びは本当に貴重な経験になりました。これからも知ること、相手の心に寄り添う事を大切にして様々な学びに繋げていきたいです。そして、今私達にできることを考え行動していきたいです。

法学部国際関係法学科1年 岡菜々美

「難民」という言葉だけに興味があり、今回この活動に参加させていただきました。私はこの活動に参加する前は、「難民」と聞くとこの日本とは全く無関係なことだと思っていました。しかし、九州の長崎に難民認定されなかった方々などが収容させられてしまう「大村入国管理センター」があり、今回私はそこを訪問させていただきました。大村入国管理センターを訪問した際は、被収容者の方々の様子をシミュレーションの材料として使うことに違和感を覚え、これは自己満足で終わっていないかと思ったこともありました。そんな中、ある被収容者の方は、「この入管問題に関心を持ってくれるだけでうれしい」、先生方は、「KARDIANOIAの活動が直接的には被収容者の方々を救う手段にはならないのかもしれないが、この活動を行うことで誰かに関心をもってもらい、多くの人に認知してもらえば、この活動はみんなに取って意味あるものだったのではないか。」というお言葉をいただきました。それらの言葉がとても心に刺さりました。ただの大学生が何か被収容者の方々にできないのはよく考えたら当たり前ですが、この問題を前にして彼らのために直接何かをしてあげることができないのはとても歯がゆいです。ですので、今回の活動、この報告書を含めより多くの方に関心、興味、認知していただけたら幸いです。

法学部国際関係法学科2年 上野大我

数年前、日本における入管や難民の問題をネット上で知り、更に、ニュースで取り上げられた事をきっかけに、日本における難民の状況と入管施設内の状況が問題になっている事を知り、この問題について学びたいと思い参加しました。授業以外で他の学生と一つのもので作り上げるという経験が乏しく、また、コロナ禍ということもあり初めてなことだらけの状況の中、協力して企画をできたことは、素晴らしい経験になりました。

そして、入管問題に関しては授業でも取り扱うことがあり、この1年でこの問題について沢山考える時間を持ちました。その中で、入管だけでなく、現在、問題になっている事柄に対して目を向け、様々な人と意見を交わし、声を挙げる事、又、その声を大きくする事が解決につながると感じました。今後は、まだ知らない問題に自分から気づくことが出来るよう、更に視野を広げたいと考えています。

法学部国際関係法学科1年 今林夏樹

大学生になって何か新しいことに挑戦したいという思いでこの活動に参加しました。この活動に参加する前は、「入管」という言葉すら知らず、難民についてもまったく知識がない状態でした。さらにコロナ渦ということもあり、ミーティングや準備のほとんどがオンラインで行われるなど、私にとっては初めてのことばかりで戸惑うことも多くありました。しかし、外部の方との連絡の取り方、文書やスライドの共有の仕方、オンラインミーティングの仕方など、そのおかげで学べたことが非常に多かったように感じています。また、グループ内でこまめに情報を共有することの重要性を強く感じました。今は、この経験を大学一年生のうちにすることができて、本当に良かったと思っています。

法学部国際関係法学科1年 武田和か

入管問題ってどんなものだろう、そんな漠然とした興味がこのプログラムに参加しようと思ったきっかけです。私はこれまで難民に対して遠い存在だというイメージを抱いており、無意識のうちに自分には関係のない話だと考えてしていました。しかしこの活動を通して多くのことを学んでいくうちに、これまでは全く知らなかった難民問題や入管問題の現状を知り、身近に起きている問題として捉えるようになりました。海外の話だと思っていたことが日本で起きているという事実を知ったときは衝撃を受けました。自分がこれまで見てきた世界がほんの一部に過ぎなかったことを痛感した瞬間でした。また、このプロジェクトでは難民・入管問題について考えるきっかけになったことは勿論、自分の思いを伝えることの難しさや考えを言語化することの大切さも学ぶことができました。本当に多くのことを吸収する場を提供していただいたことに感謝しています。これから、難民・入管問題に対してより多くの人が身近なこととして考えるようになればと思います。

法学部国際関係法学科1年 中島璃子

助言者のコメント

3年目を迎えた模擬入管は、2年目と同じくコロナ禍での活動を余儀なくされました。そのなかでも今年度の学生は2つの点で大きな飛躍を遂げてくれました。1つ目は、オンラインでの体験シミュレーションを前年度から改良し、難民認定手続きという重要な場面を取り入れたことです。2つ目は、コロナ対策を入念に行ったうえで、そして面会活動をされている竹内先生の指導のもとで細心の注意を払ったうえで、被収容者に直接向き合う時間を持てたことです。両方とも学生が自らの「心」と「知」を育てるうえで貴重な経験となったはずです。

西南学院大学法学部 准教授 根岸陽太



模擬入管は国際法学習プロジェクトKARDIANOIAの一環として実施しています。プロジェクト詳細は下記HPに記載しています。随時参加メンバーを募集しております。

<https://www.seinan-kardianoia.com/>

※本年度は西南学院大学Seinan Millennial Projectとして支援を受けています。

本プロジェクトの第一義的な目的は、「国際の狭間に置かれた人々に寄り添う」ことのできる【心 (KARDIA)】を備えた人間に成長することです。国際法学習では、助けが必要な人を「救う」側の活動に焦点が当てられることが多いですが、そもそも「救われる」側がどのような痛みを味わっているかという倫理的な感覚がなければ本当の意味での救いにはなりません。そこで、本プロジェクトに参加する学生には、まず何よりも「寄り添う」という倫理を基本に据えて勉学に励んでもらいます。

他方で、剥き出しの生の現場に置かれた人々に「寄り添う」ためには、心を尽くすだけでは不十分で、それを現実にするための知恵が必要になります。本プロジェクトは、入管・外交・戦争・裁判といった様々な場면을模擬的に体験することで、実践的に【知 (DIANOIA)】を獲得することができます。これらの模擬的な取組では、それぞれ国際難民法・国際人権法・国際人道法・国際刑事法といった人間に焦点を当てた国際法の分野を対象とすることから、理論的な学問体系も念頭に置いて勉強を進めることができます。

この理念に共鳴する学生は、学部を問わず勇気を持って本プロジェクトの門を叩いてください。仲間と一緒に心と知を成長させましょう。



西南学院大学

SEINAN

GAKUIN UNIVERSITY

